

『英米文化』 47, 13–29 (2017)
ISSN: 0917–3536

明治期におけるディケンズの
『若夫婦に関するスケッチ』 翻訳受容

水野隆之

Translations of Dickens's *Sketches of Young Couples*
in the Meiji Era

MIZUNO Takayuki

Abstract

The purpose of this paper is to provide the results of my research on translations of Charles Dickens's *Sketches of Young Couples* in the Meiji era. In 1882 (the 15th year of Meiji), KASE Tsurutaro translated and published five pieces in *Sketches of Young Couples* as *Seiyofufujijou*. This is the very first Japanese translation of Dickens's work. While researching translations of Dickens's work in the Meiji era, I found that there are two more pieces in *Sketches of Young Couples* translated into Japanese. Both of them were done by a novelist, TOKUDA Shusei in 1896 (the 29th year of Meiji). It has been known that they are translations of Dickens's work, but the originals have not been confirmed. Interestingly, *Sketches of Young Couples* has been least read and moreover least studied among Dickens's works from the day of its publication to the present.

In this paper, I firstly give general outlines of *Sketches of Young Couples* itself and how Kase's translation has been assessed by critics. Then I examine Tokuda's translations and Dickens's influence on Tokuda. Finally, by analyzing a trend in translations of Dickens's works in the Meiji era, I consider why Tokuda translated such minor pieces.

1 本邦初訳?のディケンズ作品『西洋夫婦事情』

19世紀イギリスを代表する小説家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の

『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849–50) や『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860–1), 『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859) といった長編小説の翻訳は、現在では文庫版で簡単に入手可能である。また、これらの作品を含め、他の長編小説も田辺洋子氏によって全て翻訳された。これにより、誰もが日本語でディケンズの長編を読めるようになったわけだが、ディケンズ翻訳の始まりはどのようであったのだろうか。ディケンズを含めイギリス文学が大量に日本に移入されたのは明治以降であるが、明治22年(1889年)8月から9月にかけて、『女学雑誌』に内田魯庵が「ふ、ち、」の筆名で「チャールス、ヂッケンス傳」を5回にわたり連載した(173号及び175号から178号)。その冒頭で内田は次のように述べている。

今は我國にてもABCを讀得る者——又讀得ざるも——少しく文學に目を注ぐ人は恐らくヂッケンスの名を知らざる者はなかるべし。スコット十八世紀の末に生れ十九世紀の初に盛んに著作して大に英國文學を發揮せしが是をして愈々光彩燦爛たらしめ終にビクトリア女皇時代をして文學史上に重きを有せしめしはヂッケンスならん。(内田 19)

この時代に原文であれ翻訳であれディケンズの小説が文学に関心を持つ者の間で広く読まれていたことを窺わせる文章だが、ディケンズの最初に翻訳された作品は『若夫婦に関するスケッチ』(*Sketches of Young Couples*, 1840)で、タイトルは『西洋夫婦事情』、訳者は加勢鶴太郎、出版年は明治15年(1882年)である。

初めに『若夫婦に関するスケッチ』そのものについて少し整理しておきたい。まず、明確にしておく必要があるのは、『若夫婦に関するスケッチ』は、ディケンズあるいは当時彼が用いていたペンネームである「ボズ(Boz)」の名を世に知らしめた『ボズのスケッチ』(*Sketches by Boz*, 1836)とは全く別の作品ということだ。『ボズのスケッチ』は、ディケンズが様々な雑誌に発表した主としてロンドンの人々の生活を素描した文章を収集し、単行本化したものである。一方、『若夫婦に関するスケッチ』はタイトルが示唆するように、若夫婦を扱った物語集で、11の小話から成っている。そして後述するようにディケンズはこの本を匿名で出版し、「ボズ」の名は用いなかった。ディケンズがこの作品を執筆した経緯を簡潔に述べると、1837年にエドワード・カズウォール(Edward Caswall)なる人物が「クイズ(Quiz)」の筆名で

『若い婦人に関するスケッチ』(*Sketches of Young Ladies*)を出版し、それに触発されてディケンズは翌1838年に『若い紳士に関するスケッチ』(*Sketches of Young Gentlemen*)を発表し、その後1840年にヴィクトリア女王の結婚に合わせて『若夫婦に関するスケッチ』を出版したのである。そしてこの三作品をまとめた単行本が1843年に刊行されたのだった。よって、『ボズのスケッチ』と『若夫婦に関するスケッチ』は別物である。しかし、この二作はしばしば混同されてしまうことがあるようだ。それは、例えば、現在最も手頃に入手できるディケンズ作品集と言えるオックスフォード・イラストレイテッド版ディケンズ集がそうであるように、『若夫婦に関するスケッチ』が『ボズのスケッチ』と同じ巻に収録され、その巻のタイトルが『ボズのスケッチ』となっていることに起因するのかもしれない。また、同じ「スケッチ」という語が用いられているため、これらの作品が別物とは認識されずに何らかの関連性があると想像されてしまい、その結果、二作が混同されたり、読むものを戸惑わせる説明がなされたりするのであろう。例えば、青木雄造は次のように述べている。なお、『有益雑誌』は『有無雑誌』の誤りである。

日本でも古くからディケンズは紹介され、明治十五年(一八八二年)に出た加勢鶴太郎訳『西洋夫婦事情』は彼の最初の短篇集『ボズのスケッチ集』から五篇を抜萃したものといわれ、同じ短篇集から明治二十二年に無腸道人(磯野徳三郎)訳「舟遊」が『有益雑誌』に載った。(青木 453)

繰り返しになるが、この二つは別作品であり、『若夫婦に関するスケッチ』(『西洋夫婦事情』)は『ボズのスケッチ』の一部を成すものではない。しかし、ここで強調したいのは、混乱を生じさせるほど『若夫婦に関するスケッチ』は知られていない作品ということだ。

『若夫婦に関するスケッチ』があまり読まれてこなかったのにはそれなりの歴史的経緯がある。この作品は匿名で出版され、生前に出版されたディケンズの作品集のどれにも収録されることがなかった。この事情も把握しておかなければならない。ディケンズが存命中はこの作品がディケンズのものとは見做されていなかった、というよりも、見做されては困る事情がディケンズにはあった。『若夫婦に関するスケッチ』はチャップマン&ホール社から出版されたのだが、その当時ディケン

ズはベントリー社との間で、別の出版社から著作を出版しないという契約を結んでいた。そのためにディケンズは『若夫婦に関するスケッチ』が自作であるとは公表できないので、匿名で出版したのである。当時、ディケンズが『若夫婦に関するスケッチ』の作者ではないかと疑いをかけた女性に対しディケンズは、自分が「『若夫婦に関するスケッチ』の作者であると想定するのは全くの誤りであります」(Dickens, *Letters* 213)とわざわざ書き送っている。ディケンズの死後、友人でディケンズの伝記を出版したジョン・フォスター(John Forster)がこの作品がディケンズの手によるものであることをその伝記の中で明かしたのであった。そのため、この作品は生前に刊行されたどの全集にも収録されなかったのである。そしてこのような事情があつてか、およそディケンズの熱心な読者でない限り、今日ではこの作品を読む者は恐らくいないであろう。そればかりか、ディケンズを専門とする研究者がこの作品を論じることも殆どなかった。ポール・シュリック(Paul Schlicke)によれば、2010年に『ディケンズ・クォーターリー』に掲載されたウエンディ・パーキンズ(Wendy Parkins)の「ディケンズの『若夫婦に関するスケッチ』における感情、倫理、社会」(“Emotions, Ethics, and Society in Dickens’s *Sketches of Young Couples*”)という論文が、唯一この作品を本格的に論じたものだそうである(Schlicke xxii)。つまり、『若夫婦に関するスケッチ』は発表当時から現在に至るまで、ディケンズの一般読者だけでなく、研究者の間でも等閑視されてきた作品なのだ。この事情は日本における翻訳受容においても同様であり、この作品の全訳が出たのは2015年のことで、田辺洋子訳、『ボズの素描滑稽篇 物臭徒弟二人のなまくら膝栗毛他』の中に「若き夫妻の素描」として収録されている。

こういった事情を考慮に入れると、『若夫婦に関するスケッチ』がディケンズの本邦初訳であったことは興味深い。ディケンズが亡くなったのが1870年、先に述べたフォスターの伝記が出版されたのが1873年から74年にかけてである。そして加勢訳による『西洋夫婦事情』が出版されたのが1882年であった。つまり、『若夫婦に関するスケッチ』は、本国イギリスにおいてもディケンズの作品として認識されるようになってからそれほど年月が経っていないうちに日本に移入され、他の作品に先駆けていち早く翻訳されたことになる。この作品がディケンズ作のものとして

彼の名を冠して出版された最初のものがどれなのかは確認できなかったが、私が実際に手に取ることができたのは1875年、ニューヨークのハースト社が『人生からの描写 若い婦人、若い紳士、若夫婦に関するスケッチ』(*Drawn From Life. Sketches of Young Ladies, Young Gentlemen, and Young Couples*)として出版したもので、それにはアメリカ版第一版(First American Edition)と記されていることから、イギリスでは既に類似のものが出版されていたと考えられる。加勢がどの版を参照して訳したのか、また何故『若夫婦に関するスケッチ』を他の作品に優先させて訳したのかは今となっては確かめようがないが、仮に西洋文化の移入がもう少し早かったならば、おそらく別の作品が先に訳されていたはずである。

この翻訳は今では入手困難であるために謎が多い。私が参照したのは早稲田大学戸山図書館所蔵の版であるが、これには奥付がないので出版情報は一切分からない。川戸道昭氏の調査によると、他に所蔵している図書館は東京大学の明治新聞雑誌文庫、お茶の水大学図書館、九州大学図書館(筑紫文庫)だけだそう(川戸 3)。そして川戸氏は幸運にも奥付のある版を個人的に入手できたそうだが、そこに記されているのは下記の情報である(川戸 3)。

明治十五年五月九日出版御届／同年同月十日発行
訳者 愛媛県士族 加勢鶴太郎
出版人 東京府平民 望月誠／発行元 兔屋誠／同支店

兔屋誠は当時、翻訳の他、戯作や歴史読み物などを出していた出版社であるが、訳者の加勢鶴太郎がいかなる人物かは全く分かっていない。柳田泉はこの翻訳に関して次のように述べている。

『西洋夫婦事情』(加勢鶴太郎訳)にはチャールズ・ディケンズのものという署名があるが、何を訳したものか、未詳、『スケッチェズ・バイ・ボズ』の中にこれの内容と一致するところもあるが(*Sketches of Young Couple*)、しかし私の蔵書とは合致しないところも多いから、よく調べてみたい。『相惚夫婦』、『懶惰夫婦』、『野合夫婦』、『貧乏夫婦』、『いさかひ夫婦』の五つが収まっている。短い割合に面白いものである。(柳田 33)

先に指摘したように、柳田が所有していた版もこの作品が『ボズのスケッチ』と同じ巻に収録されていたことが分かる。柳田は「私の蔵書とは合致しないところも多い」と述べているが、合致しないのは当然である。『西洋夫婦事情』は翻訳というよりも翻案、あるいは訳者による創作と言っていいほどの代物だからだ。これまで『西洋夫婦事情』の翻訳文を検討した松村昌家、川戸道昭、間二郎の三氏は、「ここに収められている五つの「西洋夫婦」の物語（「相惚夫婦」「懶惰夫婦」「野合夫婦」「貧乏夫婦」「いさかひ夫婦）」のうち、実際にディケンズの作品として認め得るのは、最後の「いさかひ夫婦」だけである」（松村 106）、「『西洋夫婦事情』という作品は、さまざまな夫婦の生態をスケッチ風に描き出すという発想を原作に借りるだけで、内容的には「訳者」の創作したものであったといわざるをえないのである」（川戸 5）、「『訳』と称しながら逸脱もいいところで、収録5篇の見出し（「相惚夫婦」「怠惰夫婦」「野合夫婦」「貧乏夫婦」「いさかい夫婦）」のうち、「怠惰」「野合」「貧乏」の三夫婦は原典に該当なく、「相惚夫婦」は見出しは同じだが内容は大ちがいが、「いさかい夫婦」だけが7,8割方ほほ忠実な訳と言えよう」（間 25）と同様の判断を下している。本書の冒頭を飾る「相惚夫婦」はタイトルだけから判断すれば“The Loving Couple”の翻訳と想像してしまうのだが、その書き出しはこうなっている。

世に相惚の夫婦といふものあり是はいかなるものぞといはんに相惚とハ此名の如く夫ハ其婦を愛し婦は其夫を敬して互いに愛恋するの意なり此の夫婦種類中の最良なるものにて一点も間然すべきところなし故に夫婦互に愛するハ人間幸福の第一に位するものなれば別に記すべき箇條もあらざれども相惚夫婦ハ人間幸福の第一に位するという実例を挙げるざれば此言を確実にするに足らざれば左に相惚夫婦が幸福を得たる一例を掲ぐべし（加勢 西一）

仲睦まじい夫婦は理想であるとの意見と述べ、以下にその実例の一つ挙げましょうという内容なのだが、田辺洋子氏の訳と原文を比べてみると

「過ぎたるは及ばざるが如し」との金言にして古諺を地で行くに、お熱の夫妻ほど恰好の例はまたとあるまい。なるほど、聖なる婚姻において結ばれた二人の

人間が熱々なのはいたくごもつともにして付き付きしいしいばかりか、二人が熱々の所を、百聞は一見に如かず、目の当たりにすれば紛れもなく微笑ましい。が、何事にも時と場合があり、他人様の前で年がら年中熱々たるような御人人は鼻持ちならぬこと夥しい。(田辺 64)

THERE cannot be a better practical illustration of the wise saw and ancient instance, that there may be too much of a good thing, than is presented by a loving couple. Undoubtedly it is meet and proper that two persons joined together in holy matrimony should be loving, and unquestionably it is pleasant to know and see that they are so; but there is a time for all things, and the couple who happen to be always in a loving state before company, are well nigh intolerable. (Dickens, *Sketches* 167)

と全く異なっており、その内容は、人目を憚らず戯れる一組の夫婦の滑稽な振る舞を列挙していくというものである。そして原作に最も近いという「いさかひ夫婦」“The Contradictory Couple”も、その訳文と原文を詳細に比較対照させた川戸氏は「『翻訳』と『意訳』をつなぎ合わせて一組の夫婦描写となしたのがこの「いさかひ夫婦」の特徴である」(川戸 10)と述べている。このように、厳密には翻訳とは言えないのだが、この『西洋夫婦事情』が日本でディケンズの作品を訳したとされる最初の書物であったのだ。

2 徳田秋聲とディケンズ

『西洋夫婦事情』は果たして当時の読者にどのように受け入れられたのか。少なくとも同時期の他の翻訳者や作家などが『西洋夫婦事情』に言及した記録は今のところ確認できず、この訳に影響を受けてディケンズの他の作品を訳そうと思いついた者がいたかどうかとも定かではない。また、明治25年(1892年)に『小公子』の翻訳で名高い若松賤子が『デイヴィッド・コパフィールド』第44章を「雛嫁」と題して訳出し、それに触発されて徳富蘆花が『思ひ出の記』(1900-01)を執筆したことはよく知られているが、そのようなインパクトを『西洋夫婦事情』が残したとも言えないようである。ゆえに加勢の訳した『西洋夫婦事情』は元より、原作の『若夫婦に関するスケッチ』も日本においてそのまま埋もれてしまう可能性はあった。しか

し、『西洋夫婦事情』が発表された14年後に、『若夫婦に関するスケッチ』に収められた小話の一つが、ある作家によって翻訳されたのだった。その作家とは徳田秋聲である。

まず、徳田秋聲とディケンズの関係について述べる。秋聲の随筆などを読むと、当時の文学者たちの例に漏れず、秋聲は特に若かりし頃、ディケンズの熱心な読者であったことが分かる。秋聲がディケンズとの関わりについて語った例をいくつか挙げてみる。

私も学校にゐた頃は、沙翁、ジッケンス、リットン等の作を囓つて其文章の影響を受けた事も多い。（「大家の翻訳よりは若い人の翻訳」、209）

私はリットンやスコットや、ヂッケンズなどを読み囓つてゐたらしく、最近その頃の学友であつた、小倉正恒氏（住友総務）に逢つた時、そのことを話されたが、無論何もわからなかつたに違ひない。（「思ひ出るまゝ」、170）

桐生君と私とは、しかし段々小説熱に浮かされて、しがらみ草子や早稲田文学などに読み耽けり、紅露二家の作品を論じ合つてゐた。書生気質や浮雲はもう大分前に卒業済みで、セイクスペヤやデツケンス、アヂソン、スコット、リットンものなぞ生半可に囓つてゐた。（「文学修業予備行動」、381）

どれもディケンズを「囓つて」いたと回想しているのは興味深い。秋聲が謙遜してそう述べているのかどうかはさておき、ここで挙げているシェイクスピア（William Shakespeare）やスコット（Sir Walter Scott）、リットン（Edward Bulwer Lytton）などは、明治時代の文学者であればほぼ誰もが味読していた作家である。また、師である尾崎紅葉に初めて会った時にディケンズの話を開かされた思い出を秋聲は事あるごとに語っている。「其文章の影響を受けた」と認めているように、自伝的小説である「光を追うて」においても「字書と首つ引きでも碌に読めもしないアヂソンやジッケンスや、リットンのやうなものもいつとはなし教科書とごつちやになつてゐた」（「光を追うて」、160）という件がある。このように、随筆や小説の中で何度もディケンズに言及していることから、若い時にディケンズを読んだ体験は、後に小説家となる秋聲にとって何らかの意味を持っていたと考えて間違いないだろう。

秋聲は明治29年（1896年）3月、『少年文集』に「内と外」と題する文章を「秋聲

樓主人」の名義で発表した。タイトルの左隣には「(ディケンズ)」と記されている。つまりはディケンズの翻訳であるのだが、その原題は記載されていない。この点に関して「内と外」を取録した『徳田秋聲全集第二十七巻』の「改題」では「本文タイトル横に「ディケンズ」と記載がある」(十文字隆行, 「解説, 改題」, 10) としか触れておらず、どの作品を訳したのかの言及はない。また、明治時代に発表されたディケンズ作品の翻訳を取録した『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》6 ディケンズ集』所収の「明治翻訳文学年表(ディケンズ編)」には、明治期に発表されたディケンズの翻訳作品の発表年月、タイトル、訳者、原題、掲載された新聞、雑誌、出版社といった基本情報が載っているのだが、「内と外」にはその原題は記載されていない。実はこの「内と外」とは、『若夫婦に関するスケッチ』の中の一編、「冷めた夫婦」“The Cool Couple”を訳したもののなのだ。恐らく、原作がマイナーな作品であったことに加えて、翻訳のタイトルが原題とはかけ離れたものであったことが、原作を特定できなかった理由と思われる。

「内と外」は舞台を日本に設定し、登場人物の名前を日本名に置き換えている。そのため、翻訳というよりも寧ろ翻案と捉えた方がいいかもしれないが、このように原作に多少手を加えることは当時の翻訳物の基準を大きく逸脱するものではないので、翻訳と言っても差し支えない文章であろう。参考までに冒頭の訳文と田辺洋子訳、それに原文をここで引用する。

昔西洋に一種の可笑しき晴雨計行はれたり、其状家屋に似て東西二個の入口を具へ、一方には男子の像、他の一方には婦人の像を立しめ、天気もし快晴ならば婦人外に出で男子内に入り、大気水気だゝば男子外に出で婦人内に入る、幾歳を経るも二人の男女は曾て面を見合すことなし、同じき原因に由りて一個は浮立ち一個は沈む如きことなし、此男女は全く利害を異にせるなり。冷淡なる夫婦の態正に似通ひたり、但晴雨計のは爾く行儀正しく思慮ありなげれど、人間に至りては往々兒戯に等しき醜態を演ずるを異なれりとす。(徳田 「内と外」 5)

古式床しき晴雨計には扉の二枚ある屋敷を象ったものがあり、内一枚には殿方の人形が、もう一枚には御婦人の人形が立っている。日和が好ければご婦人がお出ましになり、殿方は引込む。二人はお互いソツポを向き合い、さりと

て浮かれる訳でもしよほくれる訳でもなく、正しく水と油の関係にある。御兩人は冷めた夫妻の絵に画いたような雛形である——ただし、晴雨計の殿方の振舞いにはどことなく丁重にして思いやり深い所があり、その点の御相伴に、冷めた夫妻はいずれ劣らんと与ってはいない。(田辺 80-81)

There is an old fashioned weather-glass representing a house with two doorways, in one of which is the figure of a gentleman, in the other the figure of a lady. When the weather is to be fine the lady comes out and the gentleman goes in; when wet, the gentleman comes out and the lady goes in. They never seek each other's society, are never elevated and depressed by the same cause, and have nothing in common. They are the model of a cool couple, except that there is something of politeness and consideration about the behaviour of the gentleman in the weather-glass, in which, neither of the cool couple can be said to participate. (Dickens, *Sketches* 187)

「同じき原因に由りて一個は浮立ち一個は沈む如きことなし」の部分、「同じ理由で二人が一喜一憂することはない」と解釈すべきであろう。ただし、原文の意図するところはほぼ伝えており、翻訳の出来具合としては加勢訳の『西洋夫婦事情』とは雲泥の差があると言っていい。

この作品の内容を簡単に述べると、夫婦は家の中と外で見せる顔が違うというものである。上の引用の次の段から始まる前半部では「仲らひ冷淡なる夫婦の共にありし例は極めて希なり、偶々これあれば其心の燥焦すること例ふるに物なく、夫は大抵慵うげに首を俛れ、妻は口をつぐみて言はず、もし過て言語を交ふれば謎めきたる皮肉を言合ひて、迭に相手の急所を衝かんとす」(徳田 「内と外」 5), “The cool couple are seldom alone together, and when they are, nothing can exceed their apathy and dullness: the gentleman being for the most part drowsy, and the lady silent. If they enter into conversation, it is usually of an ironical or recriminatory nature.” (Dickens, *Sketches* 187) となっていて、以下、家庭内で口論する夫婦の様子が描かれる。そして後半部の始まる文は「尚可笑きは彼等夫婦が衆人の集ひたる花見などの場所に目立ちて行儀よきことなり」(徳田 「内と外」 6), “When they meet in society, the cool couple are the best-bred people in existence.” (Dickens, *Sketches* 189) と同じ夫婦が人前では仲良く振る舞う様が語られる。つまり、秋聲はその内容を酌んで「内と外」というタイ

トルを選んだのだ。細かく読み比べていくと幾つか変更を加えたところが見受けられるが、原文の意味するものはきちんと再現している翻訳と言える。

ついでながら、「内と外」が掲載された『少年文集』に、「内と外」が発表されたのと同じ年の8月から10月の3回にわたって英文学者の繁野天来が「チャールズ、ヂッケンス」を連載した。これは簡単な伝記と作家論から成り立っているものだが、伝記に関しては本文中にも言及があるように、ジョン・フォースターの『チャールズ・ディケンズの生涯』を参考にしたものと思われる。徳田秋聲が翻訳を発表したのと同じ年に同じ雑誌にディケンズを扱った評論が連載されたということは、当時の日本でディケンズのへ関心が高まっていたことの一つの表れと捉えられる。

3 秋聲によるもう一つのディケンズ翻訳

秋聲のディケンズ翻訳は「内と外」だけで終わらなかった。「内と外」を発表した翌4月に秋聲は「自惚鏡」と題する文章を「秋聲樓」の筆名で『文藝倶楽部』第二号第五編に掲載した。タイトルの下には「(でいつけんす)」と記されている。つまり、ディケンズ作品の翻訳ということになる。この「自惚鏡」は『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》6 ディケンズ集』の年表には記載がないが、『徳田秋聲全集第二十六巻』には収録されている。そしてここでも「内と外」と同様に、本文中に原題が明記されておらず、また全集巻末の解題にもその記載はないが、「自惚鏡」の原作は特定できる。それは「独り善がりな夫婦」“The Egotistical Couple”である。そのタイトルから想像できるように、この作品も他でもない『若夫婦に関するスケッチ』に収録されている一話なのだ。先に挙げた「光を追うて」の中で、主人公等が兄を頼って大阪にいた時、「兄のくれた少許しばかりの小遣が時には彼の墓口を膨らませましたが、それは漸く古本屋をあさって、目につくまゝの気紛れにジッケンスの小品集のようなものや、アーヴィングのスケッチブックなどを買うと、もう湯銭もなくなるような程度のもので(中略)」(181)と述べられていることから、恐らく秋聲がやはり大阪にいた明治25年(1892年)頃に『若夫婦に関するスケッチ』が収録されたディケンズの小品集を購入した可能性がある。また、「光を追うて」の別の箇

所では、「等はシイサイド・ライブラリイか何かのジッケンスの小品集から、ユウモラスだと思ふ一つ二つの解り易いものを翻案して、乙羽に頼んで「文藝倶楽部」の雑録欄に挟んでもらったことがあったが、実は有名なキュリアスショップも覗いてみたことはなかった」(212-213)と書かれているが、ディッケンズの作品を翻案して「文藝倶楽部」に載せたと言っているのは、この「自惚鏡」のことを指していると思われる。「キュリアスショップ」は恐らく『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41)のこと指しているのだろう。「我は如何にして小説家となりしか」の中でも秋聲は「併し英語はすきでありまして、ナショナルの第四読本を読む頃はそろそろ小説類を読み始めまして、ヂッケンスのキュリオシチイ、ショップなど読みましたが未だ能く分りませんでした」(78)と似たような述懐をしている。ちなみに本稿の冒頭で挙げた内田魯庵のディッケンズ伝は「氏の作を味はんにはまづスケッチを讀み然るのちピツクウキツク及びオール、キュリオシチー、ショップに移り最後にダビツド、カツパーフキールドを玩味すべし」(内田 36)という一文で締めくくられている。秋聲がこの評伝の存在を知っていたかどうかの確証はないが、ここで述べられた順に「スケッチ」から読んでいたのかもしれない。そしてここで言う「スケッチ」も、『ボズのスケッチ』だけでなく『若夫婦に関するスケッチ』を含めてのものであった可能性もある。

「自惚鏡」の訳文であるが、秋聲が「翻案」と言っているように、「内と外」と同様、舞台を日本に置き換えている。ここでも、冒頭部分の秋聲訳と田辺訳、原文を挙げておく。

少しはなくてはならぬは自惚なるべけれど銜かして醜きは此の自惚に上越すものはあらじ、夫婦の此の癖多きは特に耐え難し、試みに二箇の例を挙げて之を示さんか。

自惚夫婦は欲張夫婦、仲悪夫婦、子煩悩夫婦、其の他良人は妻に奴隷たる夫婦、二人して舅姑を呵める夫婦等の如き特徴を有たず、年の老、中、少に拘はらず、家族の多寡を論ぜず、纏致の美醜に依らず、或は長き短き期限を刻して来るにもあらず、われらの彼等と交際するや突如にして自惚の攻撃に遇ひ、予め之を測り知るべき便なきをもつて之を避くるの準備を施すに違なし、自惚夫婦は恰かも爆裂弾の如し、晴の宴席に於ても不意に狼藉を逞ふし、散々人々の興を醒

し、親しき疏き触る毎に忽然として火蓋を切るなり、而かも其の外面の平静にして澄し顔なるに至ては遂に及びがたし。(徳田「自惚鏡」3)

夫妻における独善には二通りある——ということを以下、二つの事例によって審らかにしたい。

独り善がりな夫妻は若年か老年か、中年やもしれず、懐が温いか、寂しいやもしれぬ。子宝にちびと恵まれているか、どっさり恵まれているか、からきし恵まれていないやもしれぬ。外っ面だけでは独り善がりな夫妻は見分けがつかず、故に花を摘む訳にも行かぬ。連中は貴殿の不意を衝くだけに、手の打ちようがない。何人といえども独立独歩で独り善がりな夫妻に先手を打つことも出し抜くことも土台能はぬ相談。(田辺 93)

EGOTISM in couples is of two kinds.—It is our purpose to show this by two examples.

The egotistical couple may be young, old, middle-aged, well-to-do, or ill-to-do; they may have a small family, a large family, or no family at all. There is no outward sign by which an egotistical couple may be known and avoided. They come upon you unawares; there is no guarding against them. No man can of himself be forewarned or forearmed against an egotistical couple. (Dickens, *Sketches* 201)

多少の脚色を加えた箇所が見受けられるが、その大意は十分伝えている。その他の箇所も本文中にはない内容を書き加えたり、或いは逆に省略したり、簡潔に言い換えているところも散見されるが、内容を歪曲しているような箇所はなく、何でも誰でも知っていると自慢する夫婦とお互い大袈裟に褒め合う夫婦という二組の独り善がりな夫婦を例示するという原作の枠組は守られている。

4 当時のディケンズ翻訳作品の傾向

では何故徳田秋聲は、現代的評価からするとマイナーな作品に属するものを翻訳したのか。明治20年代から30年代にかけて訳された他のディケンズ作品を概観すると、一つの傾向が見て取れる。それは短編や小品が多く、中には『若夫婦に関するスケッチ』と同様、現在では一般読者にはまず読まれないであろうと思われる作品までがいくつも訳されていることである。この時代にはまだディケンズの長編の

完訳と呼べるものは一つもなく、先に挙げた若松賤子による『デイヴィッド・コパフィールド』の抄訳や『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846–48)、『骨董屋』の部分訳があるだけだ。一方で興味深いのは、『ボズのスケッチ』に収録されている“The Steam Excursion”(1834)が明治19年(1886年)に磯野徳三郎によって訳され、「船遊」として『有無雑誌』に発表されたのだが、同じ作品が七年後に芳文なる人物によって「船遊山」の題で訳されていることである。また、『ハウスホールド・ワーズ』1850年4月6日号に発表された“A Child’s Dream of a Star”が、明治27年(1894年)に志川生によって訳され「小児星を夢む」のタイトルで『家庭雑誌』に掲載されたのだが、その3年後の明治30年(1897年)に国木田独歩が同じ作品を「童児の星の夢」のタイトルで同じく『家庭雑誌』に発表している。このように現代的視点からするとマイナーな作品がこの時代に複数の人物によって訳されていることは注目に値する。

では何故ディケンズの名を不朽のものにした長編小説よりも先に、短編が訳されたのか。一つには当時の翻訳の発表媒体が主に雑誌であったので、紙幅の制約があったという点が挙げられる。次に翻訳の長編小説を読む読者層がまだ形成されていないという理由が考えられる。先に「氏の作を味はんにはまづスケッチを読み」という内田魯庵の言を引用したが、その魯庵は実際に『ボズのスケッチ』から“The Black Veil”(1836)と『ボズのスケッチ』第2版に収録された“The Drunkard’s Death”(1837)をそれぞれ「黒頭巾」、「酔魔」の題で訳している。内田魯庵が翻訳家として現在でもその名を残しているのは、ドフトエフスキーの『罪と罰』を英語から重訳したことによる。当時、文学関係者の間で論争を巻き起こしたこの翻訳は実際には未完で終わっているのだが、その理由は「端的に言えば売れなかったため」(野村117)だという。ここから当時はまだ商業的に成り立つほど十分な翻訳長編小説読者がいなかったと推察できる。もう一つの理由として考えられるのが、ディケンズの代表作と言えば短編よりも長編小説という既に欧米では確立していたディケンズの評価に関する情報がまだ乏しかったため、秋聲を含めた当時のディケンズの翻訳者たちにはディケンズに対する先入観があまりなかったということである。これらの理由により、ディケンズ翻訳の黎明期であるこの時代には短編が多く訳され

る結果となったと考えられる。先にも引用した秋聲の言葉を借りれば、「ユウモラスだと思ふ一つ二つの解り易いもの」を、訳者自身が自由に選んで訳した結果と思われる。そのために、現在ではまず選ばれないような作品が訳されたと推測できる。『若夫婦に関するスケッチ』もそういった作品の一つであったと言えよう。

最後になるが、徳田秋聲の翻訳が出てから約百年後の1990年に『若夫婦に関するスケッチ』の翻訳が加勢鶴太郎訳と同じ『西洋夫婦事情』の題で『中京大学教養論叢』第三十一巻第一号に掲載された。全訳ではなく、序文と5つの小話を訳したものに解説が付されたものである。掲載されたのが大学紀要という一般の人の目にはあまり触れない書誌とあって、この訳も加勢鶴太郎と徳田秋聲の訳と同様、埋もれてしまった翻訳と言える。

(本稿は2016年6月11日に開催された英米文化学会第150回例会(於日本大学)での発表原稿「明治期におけるディケンズ作品翻訳受容の一端——『若夫婦に関するスケッチ』を中心に——」に加筆・修正を施したものである。)

引用・参考文献

- Dickens, Charles. *Drawn From Life. Sketches of Young Ladies, Young Gentlemen, and Young Couples*. New York: Hurst, 1875.
- *The Letters of Charles Dickens* vol. 2. Eds. Madeline House and Graham Storey. Oxford: Clarendon, 1969.
- *Sketches of Young Gentleman and Young Couples, with Sketches of Young Ladies by Edward Caswall*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- Parkins, Wendy. "Emotions, Ethics and Sociality in Dickens's *Sketches of Young Couples*." *Dickens Quarterly* 27. 1 (2010): 3–22.
- Schlicke, Paul. "Introduction." *Sketches of Young Gentleman and Young Couples, with Sketches of Young Ladies by Edward Caswall*. By Charles Dickens. Oxford: Oxford UP, 2012. vii–xxvi.
- 青木 雄造 「解説1 ディケンズの影響とその生涯」『荒涼館1』ちくま文庫 1989年 453–458頁
- 岩田 託子, 榎本 洋, 楚輪 松人, 梅 正行, 永岡 規伊子, 望月 千栄子 訳 『西洋夫婦事情』チャールズ・ディケンズ著 『中京大学教養論叢』第三十一巻第一号 中京大学教養部, 1990年9月 25–75頁

- 内田 魯庵 「チャーレス, デッケンス傳」, 『内田魯庵全集第五卷』ゆまに書房 1984年 19-36頁
- 梅宮 創造 「明治期のディケンズ翻訳」『比較文学年誌』第四十七号 早稲田大学比較文学研究室, 2011年3月 1-20頁
- 加勢 鶴太郎訳 『西洋夫婦事情』チャーレス, デッケンス著 出版情報なし
- 川戸 道昭 「『西洋夫婦事情』——本邦初のディケンズの翻訳」『翻訳と歴史——文学・社会・書誌』第九号 2001年11月 ナガ出版センター 1-11頁
- 川戸 道昭・榊原 貴教編 『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》6 ディケンズ集』大空社, 1996年
- 『図説 翻訳文学総合事典』第3巻 大空社, 2009年
- 繁野 天来 「チャールズ, デッケンス」, 『少年文集』第二巻第八号 1896年8月 25-30頁, 第二巻第九号 1896年9月 18-22頁, 第二巻第一〇号 1896年10月 27-33頁
- 十文字 隆行 「秋聲のこども」, 『徳田秋聲全集第二十七巻』八木書店 2002年 3-9頁
- 十文字 隆之・八木書店出版部編集課全集係 「改題」, 『徳田秋聲全集第二十七巻』八木書店 2002年 10-17頁
- 田辺 洋子訳 『ボズの素描滑稽篇 物臭徒弟二人のなまくら膝栗毛他』チャールズ・ディケンズ著 溪水社 2015年
- 徳田 秋聲 「内と外」, 『徳田秋聲全集第二十七巻』八木書店 2002年 5-7頁
- 「自惚鏡」『徳田秋聲全集第二十六巻』八木書店 2002年 3-5頁
- 「思ひ出るまゝ」, 『徳田秋聲全集第二十二巻』八木書店 2001年 164-237頁
- 「大家の翻訳よりは若い人の翻訳」, 『徳田秋聲全集第十九巻』八木書店 2000年 208-209頁
- 「光を追うて」, 『徳田秋聲全集第十八巻』八木書店 2000年 125-231頁
- 「文学修業予備行動」, 『徳田秋聲全集第二十二巻』八木書店 2001年 378-384頁
- 「我は如何にして小説家となりしか」, 『徳田秋聲全集第十九巻』八木書店 2000年 78-79頁
- 野村 喬 『内田魯庵傳』リプロポート 1994年
- 間 二郎 「ディケンズ「旧ノート」から(1)——明治期におけるDickens受容の小片『西洋夫婦事情』をめぐって——」, 『英語英文学研究』第二十八号(二) 創価大学英文学会, 2004年3月 25-34頁
- 松村 昌家 「ディケンズ」, 『比較文学シリーズ 欧米作家と日本近代文学第五巻英米篇II』教育出版センター 1975年 103-133頁
- 宗像 和重 「〈物〉との格闘」, 『徳田秋聲全集第二十六巻』八木書店 2002年 3-10頁

- 宗像 和重・八木書店出版部編集課全集係 「改題」, 『徳田秋聲全集第二十六巻』八木書店
2002年 11-23頁
- 柳田 泉 『明治初期翻訳文学の研究』春秋社 1961年